
1


2


3


4

【写真説明】
１．無肥料無農薬の米を土鍋で。噛むほどにおいしさが広がる／２．令和２年７月豪雨災害時にSNSで支援を呼びかけ。農業就業改善センターにはマスク、タオル、消毒液などの支援物資が集まった／３．耕作放棄を解消した田んぼで自然栽培米づくりワークショップを開催／４．地元農産物を活用した離乳食「あんしんまんま」。おかゆや季節の野菜をペーストにして食べやすいようになっている



つなぎFARM推進業務

小野 孝弘さん（35＝内野）

つなぎFARMを日本中に。

私はこれまで、自然栽培の生産・販路拡大に取り組んできました。生産拡大では、野菜や米の試験栽培の様子をSNSに掲載。ワークショップや講師を招いて講習会を開催するなど、自分の生産技術を高めると同時に、参加者と共有し、担い手を増やす取り組みを行いました。販路拡大では、移動販売車の製作、マルシェに出店、都市圏への営業、加工品開発に取り組んできました。

昨年度当初、新型コロナウイルスが猛威を振るい、予定していたイベントが中止。農家さんも飲食店での取り扱いが減り、イベントでの直売も難しく野菜の売り先がない状況でした。そこで、以前から企画していた加工品開発にそれらの野菜を使うことにし、町の委託事業に手を挙げ製作を開始しました。6月にワークショップを開催し、参加者と手植えの田植えをした直後、令和2年7月豪雨災害が発生。消防団として行方不明者の捜索で一週間ほど活動しました。落ち着いた後に田んぼを確認すると、一部に土砂が流入、稲の半分くらい砂に埋まっている状態。さらに、梅雨の長雨で稲が濡れ続け、病気が発生。前年度から面積を倍に増やしましたが、収量は3分の1になりました。

米、水、野菜だけ。

農業のかたわら、SNSで支援物資を全国に要請。地元宮城県の同級生や仕事関係者、熊本地震ボランティア、他地区の協力隊、農業の勉強会参加者など、のべ154人から農業就業改善センターにたくさんの支援が届きました。物資は、町内の避難所や被災者に配布、八代の保育園、芦北の小学校、老人福祉施設、協力隊を通じて全てお渡ししました。支援金も、水俣市のNPO法人へお願いし100万円、個別に20万円のご支援をいただき支援物資を購入し配布しています。

町自然栽培品を使った安心の離乳食

新型コロナウイルスで行き場の失った野菜と、7月豪雨で収量が減ったお米で試作を繰り返し、ことし4月に完成。「あんしんまんま」という離乳食です。安心な「まんま（ご飯）」自然栽培の米、野菜、中尾水源の湧水しか使わない素材その「まんま」、「ママ」が安心という意味を込めています。この商品を全国の子どもたちに届けるため、自然栽培の農産物の生産量を増加させ、加工・流通させるシステムを作り、残り10か月となった協力隊任期後も津奈木町に残って事業が取り組めるよう活動します。